

46 【もくりこくり】

村の誰にきいたのか、それもいつきいたのか忘れたが、なんだかわからない、正体不明のおばけを【もくりこくり】(すこしなまると【むくりこっくり】) というのだそうです。

蒙古(もうこ) 高句麗(こうくり) という字があてられる。

もちろんそんな漢字は、その頃のぼくは知らない。

ただぼくには疑問がありました。

なんだかわからない、正体不明のおばけが【もくりこくり】なら、おばけのほとんどは、なんだかわからなく正体不明だから、おばけのほとんどは【もくりこくり】なんじゃないのか。

疑問があるときは、懐爺のところに行くにかぎります。

「せつないのう」

ぼくはいいました。

「こんどのおばけはなんですか」

懐爺がききました。

「まだおうとらん。【もくりこくり】たあ、なんじゃ」

「【もくりこくり】はわたしにも、なんだかわかりません。なにしろ正体不明のおばけですから」

「おばけはみんな、そうじゃろ」

「そうですが、【もくりこくり】は、【がしゃどくろ】や【ぬらりひょん】みたいに姿をあらわしませんからね」

「すがたあらわしたら、ふめいじゃないんか」

「金ちゃん、理屈っぽいですね。まあなんともうしましょうか」

懐爺はさすがに頭を抱えました。

「つまりその、おばけの正体を絵としたら、絵に描けないおばけが【もくりこくり】なんです」

「えにえがけないおばけなんぞ、つまらんのう」

「【もくりこくり】は、つまらないおばけなんです」

「つまらんけど、あいたいのう」

正体不明なら、なおさら会いたい。

天の邪鬼(あまのじゃく)のぼくは、懐爺にわがまをいいました。

「お婆けもだんだん少なくなります。しかもだんだん絵に描けなくなります。人間に圧されて在る処がなくなっているからです。いずれお婆けはみんな【もくりこくり】になり、そしてこの世が闇になったら、お婆けはすっかり消えてしまうでしょう」

「つまらんよのなかに、なりそうじゃのう」

「映画でなら、もっと面白い、もっとこわいお婆けに会えるでしょう。【かいびょう】とか【おいわさん】とか」

「えいがみるなら、まちにいかにかねらん。まちにいくかねも、えいがみるかねも、ありやせん」

「わたしがお金を貸しましょう」

懐爺にもお金なんかないから嘘にきまっています。

それに、そんなことをしたら、【むだづかい】にやられてしまいます。

「いらん。えいがより、ほんものがええ」

「お婆けには、本物も偽物もありません」

「かいじい、なんとかせいや」

「なんともなりません」

「せつないのう」

ぼくはせつなく、それ以上に口惜しかったのです。

この口惜しさを、今でも忘れることはありません。

さて、この【もくりこくり】には、後日談（ごじつだん）があります。

十日後、とてもとても寒い夕方。

懐爺が祠の奥から、ずいぶん古い本をもってきました。

「これは、なんじゃ」

「義経の伝記（でんき）です。義経のことがくわしく書かれています」

「よしつね、たあ、うしわかまる、のことじゃろ」

「金ちゃんはものしりですねえ」

うれしがってぼくは、歌をうたいます。

「きょうの、ごじょうの、はしのうえ～」

「金ちゃんの上手な歌は、こんどゆっくりききましょう。さて、義経といええ」

「そらあ、うしわかまる。きょうの、ごじょうの、はしのうえ～」

「いやその、義経の、家来というか相棒というか」

「そらあ、べんけい。きょうの、ごじょうの、はしのうえ～」

「それぞれ、その弁慶が、【もくりこくり】だったんですねえ。この本にくわしく書かれています」

「やっぱり、のう。あんなすげえやつが、おぼけじゃないわけがねえもの。べんけいの、におうだち」

「金ちゃんはものしりですねえ」

うれしくないはずがありません。

この村では、ものしりが一番えらい、とぼくはずっとおもってきました。

(だから、かいじいが、いちばんえらいのだ)

「わしのことより、【もくりこくり】じゃ」

「そうそう、その仁王立ちですが、あれは、弁慶の影武者だったという話です」

「【かげむしゃ】たあ、どんなおぼけじゃ」

「本人にそっくりばける。そうですねえ、ばけるんなら、やっぱり、おぼけなんでしょうね。影武者とは、替え玉でもあります」

「わしも、やるやるやるぞい。かえだまさくせん」

「話をもどしますとね、じつは、あのとき、弁慶も、もちろん義経も、死んではいない」

「よかったのう。わしもそうおもった。すきじゃのう、よしつね、べんけい。いいのう、なりたいのう、よしつね、べんけい」

ぼくがうれし泣きすると、懐爺も眼に涙をためました。

「金ちゃん、泣いている場合ではありません。話をすすめないで、暗くなります、雪もふるかもしれませぬ。【ゆきおんな】や【ゆきおとこ】に、大切な話を、邪魔されるかもしれませぬよ」

「それはせつないのう。かいじい、はやく、はなさんかい」

「はい、了解しました。【かげむしゃ】をつかって、まんまと奥州（おうしゅう）からのがれた、義経と弁慶は、いまの青森県まで行って、そこから小舟で北海道に渡ります。その地点には義経が通ったという、証拠（しょうこ）もあります」

「しょうこ、なんか、のこすと、よりともに、ねらわれんかのう」

「いいところに気づきましたね。頼朝は執念深いですからねえ。執念深

いおぼけを【よりとも】というのは、ごぞんじでしょうね」

「ごぞんじに、きまっとるじゃろ」

きまってなかったが、そういいました。

「だから、わからない証拠。つまり、暗号（あんごう）とか、目印（めじるし）とか」

「めじるしは、わしもよくつける。けんど、あんごうは、どうつけるんじゃ」

「たとえば、金ちゃんなら、金とか、わたしなら、爺とか。だから、義経は義とか、弁慶は弁とか慶とか」

「あんごう、たあ、ばれやすいのう。わしじゃったら、よりともの、よりとか、よりともの、ともにするなあ」

「はいはい。義経も弁慶も、あわてていたから、おもいつかなかったんでしょうね」

「かいじい、はやく、さき、いかんかい」

「すみません。それから義経と弁慶は、原住民にたすけられて、北海道から蒙古までにげました」

「もうこ、たあ、おそろしいとらのおる、ところかい」

「猛虎ではありません、蒙古は、とうじの国の名前。しかしとちゅう嵐で、船が沈んで、義経は海の底へ、弁慶は鯨（くじら）の腹へ」

「いいのう、ろうまんじゃのう。とうぜん、たすかったんじゃろ、のう」

ぼくは、半分おどしました。

「はいはい、とうぜんです。ふたりとも蒙古の侍に助けられて、義経はその後、成吉思汗（じんぎすかん）という、頼朝よりも立派な、殿様になりました。この殿様の名前は、いささか暗号めいていて、源義（げんぎ）は、仁義（じんぎ）だからつけた名だが、災難が多くて好かん、というところからきています。さていっぼう弁慶は、殿様の侍大将になって、なんだかわからないけれども、やたらに強いために、【もくりこくり】と名づけられました。めでたし、めでたし」

懐爺は、大きくためいきをつきました。

「めでたいのう、よかったのう」

くりかえしつぶやきながら、ぼくは暗くなった道を、いっさんに走りだしました。

こんな気持ちいい、おばけ話は、浪漫は、初めてでした。